



ピノコパパのエッ
セイ集から



一枚の履歴書

pinokopapa

一枚の履歴書— 1 —

父が亡くなって二十五年が経とうとしております。今年私は父の逝ってしまった年になりました。そんな時、私は不意に父がどう生きてきたのか気になってきました。昔、父がこんな話をしていたと思い出せることは全部、思いだしてみました。

父は四国の山奥の、子沢山な貧農の長男に生まれ、当時の義務教育を済ませると一人前の労働力として働いて、家計を助けたそうです。父親と一緒に、山から切り出した材木を吉野川に流して筏に組む仕事もしたように聞きました。九州の炭鉱に勤労奉仕で出かけ、地下の坑道にもぐって百日間地上に出ず、頑張り通したとも言っておりました。それによって表彰されたそうです。勿論それだけ。他に何か送られたりはしてなかった様子でした。表彰状一枚だけです。でも、父はそれが自慢であったようです。どんな風だったんでしょう、髭も髪も、もちろん風呂にも入れてなかったでしょうから。食べてたのは、おにぎりとお水だけ。そのおにぎりだって、今のように何かが入っている訳でもなく、ご飯のみ、そして梅干しか沢庵を添えてとそんな風だったそうです。食べて、うつらうつらと寝て、また鶴嘴とスコップで粉じんの舞う中、石炭をトロッコに乗せて過ごした百日でありました。

そんなことのあった十代後半に、父親に死なれます。四十幾つであったと聞いています。父は残された家族の長男として、一家の大黒柱になりました。その後の事は一枚の履歴書に書かれています。父は大阪の機械部品工場に働きにいったのでした。と言っても、その工場は父親の弟、つまり父の実の叔父がやっている工場であったようです。当時の大阪の機械部品工場は、軍需景気でわいていて、身内を欲しがっていた叔父に誘われて、大阪に行き、そこで働いて仕送りをしてました。そして、徴兵検査です。甲種合格でありましたが、その徴兵検査の場で、海軍だなと早々に言われたそうです。体格こそ小柄で、体は健康、そして筋骨もたくましいから海軍だということだとか。当時、海軍に徴収される人間は、その場で言われたそうです。

元々、海軍は志願兵が中心で、召集される新兵の約六割が志願兵、残り四割も補充要員を召集するのであって、召集人数はきわめて少なく、頭数が多ければそれでいい陸軍とは大違いでした。なぜなら海軍は技能集団であったからです。艦を動かし、海で戦うには、頭数が大事なのではなく、操船技術の修得者、専門技術者でなければならなかったのです。後に父も扱いとして召集

兵から、志願兵に変更されました。新兵教育（初年兵教育）の三か月間が終わって後、新兵の技能教育のための兵学校を二校、重ねて講習を受けることになったからでした。なおこれは推測ですが、異例なことであったと思います。どう捜しても、このように二校も技能講習を受けたという体験報告を目にしたことはありません。それ故でしょう、父は二校目を終えた段階で上等兵になっています。一校目を卒業して一等兵、二校目で上等兵ということでしょうか。海軍ではこの階級の呼び方を、上等兵なら上機と略して呼んでおりました。上等機関兵と、その技能の呼称も入れて呼んでいたからです。

一枚の履歴書 - 2 -

- 1 - の方で海軍の階級制を上等兵と書きました。これは父が召集された時点では違っておりました。海軍は独自の階級制を持っており、最下位が四等水兵で、袖にも襟にも階級章は付いておらず、それをもってカラスとよばれていたようです。後に海軍の階級も陸軍と同様になり、二等兵から上等兵と上がってゆくということに改正されました。しかし、それでも陸軍は年数と特別な功績で上がるということのようでしたが、海軍は特技講習とその試験に合格することで階級が上がってゆきました。ですから、陸軍は階級じゃない飯の数だという悪弊があって、古参兵による不合理な制裁などがまかり通っていたのでした。

戦時下新兵教育は三か月でありました。その間、朝は五時に起床ですが、総員起こしの五時丁度より前にスピーカーで一五分前の放送があり、さらに五分前という放送があったようです。かといって、まえもって五分前に起床してはいけなくて、吊床に入って息を殺して待っていて、総員起こし、吊床納めの号令で一斉に起床し、新兵の一日は始まります。この吊床納めが海軍特有の激しい訓練の象徴だったようで、どの体験記にも書かれています。父が召集された佐世保の海兵団での報告の一部にも吊床納めの競争が書かれておりました。この教務班での吊床訓練は兎に角素早く、かつ正確に、と言うことが要求され、これが適わなければ海軍魂注入棒、直心棒が容赦なくふるわれました。今でいう、尻バットと言うことです。他にストッパーと言うものもありました。錨をもやう太いロープを1メートル程に切ったもので、鞭のように使われました。これが一番つらかったようです。軍隊に制裁は付き物と思われていますが、これらで尻を叩くことはあっても、顔は叩きませんでした。更に、顔は平手以上で叩いてはいけなくなっていたからです。また私的制裁は禁止されていました。むやみやたらに、何でもかんでもというわけではなかったようです。しかし、それでも激しい暴力であったことは間違いなく、そのため、実弾演習などの際、暴力をふるった側の古参兵が初年兵に撃たれるという事件もあったようです。

先日、BS放送で「海軍」という映画を見ました。この映画は考証が十分になされておらず、失笑気味になりました。貴様ア一と叫んでおりました。海軍では決して貴様とは言いません。自分のことも、自分は、とは言いません。お前、であったり、**上等兵、**上機兵と呼びました。さらに海軍の敬礼は肘を張らず、小さくすることは有名ですが、何か報告する時はそれが終わるまで敬礼は手を降ろしてはならず、し続けていなければなりません。もっと陸軍と違うことは、上官の呼び方に殿とか閣下とかの敬称を付けず、呼び捨てであったことです。相手が師団長であろうと何であろうと、師団長と二等兵が呼び捨てます。それが海軍でありました。服装も、初年兵は所謂セーラー棒にセーラー服で、父のこの服での写真が残っております。そのほかにもう一枚残っている写真では、父の着ている軍服は詰襟ではありません。開襟平襟式で、つまり背広型で、陸軍とは全く違っております。そして、これは海軍でもちょっと特異なもので、海軍陸戦隊の服装の軍服だということが調べてみると解りました。海軍での自動車講習を受けたのですから、陸戦隊だったのでしょう。

一枚の履歴書 - 3 -

その自動車学校ですが、佐世保から近いのであれば出水にもあったようです。しかし父は呉に向かいました。呉と言えば、江田島です。大和が建造されたところでもあります。江田島の兵学校は海軍士官の名門養成校でありました。もちろん、父はそんなこととは無縁でありました。士官学校に入るには、最低中学校を出ていなければなりません。航空兵も同様です。その学校の付属自動車学校で、父は講習を受けたのでした。全員で約四十名でありました。そこでの期間は三か月。その間、自動車運転の勉強だけしていればよかったなんてわけがありません。短艇訓練もあれば、回れ回れもあります。教務班兵舎の掃除の事です。デッキブラシやヤシの実を半分に切った殻をもって、床をこすり洗いするのです。初年兵教育ほどではありませんが、訓練は続けられておりました。江田島名物、おさるのおけつ、は短艇訓練のあと、お尻の皮が剥けて血がにじんだ様子を言ったものでした。

学校での講義は当然厳しかったのですが、教科書は各回初めに配られ、終わると回収されました。ノートも一緒に回収されます。講義で教えられたことはすべて軍事機密であったからです。今の自衛隊でも、戦車のエンジンのかけ方は機密で、調べても解りません。しかし、陸軍の戦車のキーがオークションに出ており、その形を見ると、ピストルのような形をしており、その銃身のように見える丸棒の先にくびれがあり、指先で持つ部分がピストルの把持部のようになっています。そこからの推測ですが、丸棒を突き刺し、指先で持つ部分を回してスタートさせていたのではないのでしょうか。丸棒の先にくびれはキーが抜けないようにという工夫であるとの解説

もありましたから。

そのような授業の進め方であっても、試験は週に2～3回ありました。問題はだいたい10問で、解答用紙はざら紙一枚でありました。しかしその結果は回答者には帰ってきません。その答えも軍事機密を書いたものだからです。正解であっても不正解であっても、外に漏れれば機密が暴露されてしまいます。また、その点数は担当教官と教育将校のみが承知しているだけで、本人にも知らされませんでした。しかし、それならばどうやって勉強したのでしょうか。授業内容も、解ろうと解るまいとお前たちの勝手だ、俺は教えたぞ、というのが講義のやり方でした。それゆえか、講習生40名の内、20名弱しか合格できなかったようです。父はここで海軍自動車免許証を得ております。しかしながら、不合格となった者は階級もあがらないままで、元の海兵団に返され、そこから、特技章もない状態で出征と言うことになります。多分使い捨てのコマ同然の扱いとなったと思われます。

そんな中、父は次の事に進むまでの間、なぜか師団長の当番兵になっております。その選考の有り様は解りもしませんが、特別に県の自動車免許証を取得してくるように言われ、役所に願いを出しにゆきました。もちろん書類さえ出せば、その日のうちに発行されます。このころ一般道を走るには県からの免許証も必要だったのです。

一枚の履歴書－4－

父は当初、そんなことは知らされてなかったようで、言われるままに一般公道を車で走るための免許証をもらいにいったようです。その後、射撃訓練の際、他の者からは違って、一人拳銃の射撃訓練をさせられました。父は小銃の射撃訓練でも成績が良かったらしく、珍しくこのことは自慢しておりました。というのも、山で猟銃を撃っていた経験がものをいったようです。当時の軍の士官クラスは拳銃を自分で調達することになっており、よってさまざまな拳銃が用いられていたようです。しかし下士官兵にはやはり南部式が支給されていたようなので、父もそれで訓練を受けたのかと思います。特に海軍陸戦隊は南部式14年式拳銃を採用しておりました。

そして、乗用車運転の稽古をさせられ、2～3日すると、右に拳銃、左に短剣の付いた皮の腰帯を渡され、師団長の当番兵を命じられました。拳銃の稽古も、乗用車に慣れるように運転の稽古をしたのも、このためでした。おかげで、楽させてもらった、と父は言うておりました。朝の海軍体操その他の特別訓練が終わると、指導将校に、当番に行つてまいります と報告し、車のエンジンをかけ、鎮守府の門を徐行はしても、停止することなく、車で通り抜けて師団長を迎え

に行きました。その通り抜ける車に向かって、門の歩哨がささげ銃の礼をとっているのがバックミラーにみえたそうです。たとえ師団長が乗っていなくても、車の師団長旗がそうさせるのです。

師団長の官舎につくと、自動車の音で女中さんが出てきて、もう参りますと告げられます。それで、玄関先に控えて待っていると指揮刀を下げて師団長が出てくるのだそうです。何事も5分前が海軍の伝統だから、たとえ師団長であろうと何時も5分前に出てきたと笑っておりました。

姿勢を正し、敬礼をして、お迎えに参りましたと言うと、軽く敬礼を返し、ご苦労、といいます。無口な人だったと思い返しておりました。その師団長の当番兵も、一人でこなしていたようで、気に入られていたみたいです。しかし、それも束の間の事で、父は千葉の館山砲術学校付属戦車学校に行くことになりました。戦車の操縦士の講習を受けることになったのです。戦車の操縦士になるには車の免許証を持っていなければなりませんでしたが、自動車学校の受講生から選ばれることになったのではと思います。とはいえ、兵学校の兵の講習を二校受けるというのも珍しいことであったようです。

鬼の日向か地獄の伊勢か、それより怖い砲術学校いわれた砲術学校は館山でありました。ところが、この館山砲術学校に付属していた戦車学校が途中から横須賀兵学校の附属に変わります。そこでまた、父は横須賀へ移動しました。戦車操縦の講習期間もほぼ3か月。学科の講習は横須賀で行われましたが、操縦訓練の実技は辻堂演習場で行われていました。私も母も、そんなことは聞いたことがなかったのですが、私が東京から引き上げる時、両親が来ましたので、一緒に箱根から藤沢を経て江の島まで案内しましたところ、江の島の頂上から島の裏側をスルスルと降りて、海岸の岩に腰かけ、ここからも、辻堂からも、富士が見えるんだと、遠い富士に見入っておりました。父にとっては、40年前ぐらいのことになるのではと思います。

その頃の写真だと思われるものが一枚、母の持っているアルバムに残っています。それが先に記した、トラックの前で写した写真です。背景は何も映っていません。トラックの運転席とボンネットが見られるだけです。

一枚の履歴書 - 5 -

横須賀の兵学校は、海軍の中でも陸戦隊を養成する特別な兵学校であったようです。したがって、戦車の操縦士の講習もここで一括して行われるようになったのだと推測します。ここから辻堂は遠いのですが、終戦後この辻堂演習場は米軍の演習場としても使われたぐらい広い演習場でありました。父など講習を受けるものは、横須賀にいたのではなく、この辻堂の教務班の宿舎にいたのだと思います。

戦車操縦士の訓練は、過酷でありました。実際に乗って練習したのは、当初85式軽戦車だと思っていたのですが、どうも97式中戦車であったようです。現在の自衛隊の戦車もそうですが、操縦士は砲塔および機銃座から独立した所にて、入るときもハッチの蓋を人の手で閉めてもらわなければならなかったようで、要するに自分では出られない様式でありました。つまり、完全に独立していて戦車が何か事あるときは、運命を共にする確率は操縦士が一番高かったのです。

操縦士席は敵の攻撃があった時、一番に狙われました。戦車を動けなくするという目的のほかに、操縦士の視界を確保するための視察窓が脆弱であったからです。さらに、視察窓を閉めた時の代替である覗窓から視界を確保しようとするのですが、そこは幅2ミリ長さ12センチのスリットでしたので、対戦車ライフルなどで狙われると、わずかでも溝がある覗窓は簡単に打ち抜くことが出来ました。ですから戦闘時には操縦席の視察窓や覗窓の辺りに銃弾が集中したそうです。よって、戦闘時は操縦士はもう盲目も同然で、操縦は戦車長の指示だけが頼りの操縦になりました。時には車長が操縦席に足を突っ込み、操縦士の両肩に足を置いて、右へ曲がる時は右足で肩を押し、左はその反対で、スピードを増すときは背中の中を、アクセルを踏むように力を増して押したという記述もありました。ところが操縦席は隔壁で独立していたということでありましたから、それと反しているようなので、その辺りことは解りません。

世界の戦車王国と言え、その頃はドイツでありました。ところが、その戦車を輸入して、そこから改良を重ね、試作を繰り返して完成させたのが85式軽戦車でありました。これはその当時の世界の戦車としては最高水準のものでありました。よくゼロ戦の事は喧伝されますが、日本は何故か戦闘機なら戦闘機で、その時点で世界に並ぶものがない最高の能力を持ったものを作り上げてしまいます。それは戦車でも同様でした。当時の戦車王国のドイツが作った最新式の戦車であっても、戦車砲は乗っておらず、機銃が二座あるだけでした。ところが日本は戦車砲を乗せたのです。その砲のために砲塔は旋回し、また砲は肩で上げ下げするだけのものですが、俯仰角を取って照準を合わすことが出来ました。それだけのものが、当時は新しかったのです。しかも、砲を撃った時、衝撃を抜くために砲は後退してきますが、この動きのために砲の威力は減ぜられる所があり、それを免れるために砲身が不恰好に短いものになりました。また、さらに、当時の船には荷を積み込むためのクレーンは7トンの能力しかなく、それを考え、戦車を軽くしてそれに対処したので、装甲は薄いものになってしまいました。ゼロ戦がスピードと旋回能力のために、操縦士の安全対策がないがしろにされたことと共通しています。ですから、いかに宮崎氏とスタジオジブリであっても、風立ちぬは見ませんでした。そして、それがノモンハンのロシアとの戦車戦での大敗北につながるのです。ノモンハンにロシアによる大虐殺と云っていいほどの敗北でありました。次々と殺されてゆく兵隊をみて、学校出の新米将校が発狂し、日本の兵隊さんは強いはずだと繰り返したと、その場にいた、やはり戦車兵であった司馬遼太郎氏は書いております。

さらに、日本の駄目なところは、その時最高の性能の物を作り出したものですから、もうそれ以上のものが作れないことです。また、それで安心してしまうのです。ですから、ゼロ戦が出来てしまうと、さらにその上の物を作ろうという風になりません。世界は日本になかなか追いつけず、苦戦し、負け続けて、その中から改良に改良を積み重ね、ゼロより上の物をとうとう作り出して、空で圧倒し、駆逐してしまっただけでした。戦車もそうでした。ロシアは圧倒的な馬力と主砲の威力で日本の戦車を蹴散らしました。対戦車戦を行ってはいけないと、戦車の闘い方を記したマニュアルに書いてあるなんてことがあるのは戦前の日本の戦車だけでしょう。じゃあ、何をもって敵戦車と戦えというのか。爆弾を抱えて戦車の下に飛び込めと言います。早くては効果がない、体が戦車の下に来た時、爆薬の紐を引っ張れ、と教えます。背囊に爆薬を詰め、発火紐を握りしめて戦車の前に身を投げ出し、戦車が自分を轢き殺しかけた時、紐を引くのです。これが切り込み隊と言われた戦法でありました。戦闘機による特攻のみならず、回天、菊花、とこれが戦術戦法と言えるのでしょうか。自爆テロより性質の悪い、強要された死でありました。その戦法を支えた思想が、潔く死ぬという美学でありました。フィリピン戦においても、母に潔く死んで来いと言われましたと、切り込み隊に志願した若い人がいたと書かれています。その体験談を書いた人もその切り込み隊に加わって出撃し、からくも生き残って帰って来ていました。この体験記には、死に急いだこの若者をどこか讃える意識が見えます。あの飢えと汚辱にまみれた戦場で、自らは命ずるだけの指揮官に対して命を捧げるなんて、美学でしょうか。

ここで死んでは無駄死にだと一個中隊を転身させた中隊長を、なぜ死んでこなかった、それでも帝国陸軍かと責め、翌日一人で切り込ませ、その中隊長の言い残した、隊の者には責めを負わせないようにという懇願に同意しておきながら、さらにその翌日、お前ら、隊長一人死なせるのかと言って出撃させ、全員を殺した大隊長もいます。彼は生きて帰ったそうです。そんな体験記を読むと、英霊に尊崇の、と言って得々としている彼の人の顔がみえます。戦闘機による特攻を発案した某中将は、8月15日の天皇陛下の放送の後、自分は飛行機の操縦が出来ないので、若い兵士に操縦してもらって特攻を行い、しんでいったそうですが、これに対しても賛美の言葉と、若い兵を道連れにしたという非難の声の両方があります。それにしても、彼は自分が特攻に送り出した兵士たちと同様、自分も殉死いたしました。回天、菊花をもって幾人も死へ追いやった黒川参謀長はのうのうと軍人恩給をもらい、戦後を生きてまさに天寿を全うしました。八十何歳だったとか。

この香川の地にも、今の詫間電波高専の裏に、防空壕と、海岸に水上飛行機を引き上げるセメントのスロープが長く続いている浜があります。ここを、水上フロートを付けた特攻機が何機も

飛び立ちました。いまは、子供がこの遠浅の海に釣り糸を投げ込み、魚釣りをしています。かつて、そこを特攻機が飛んだのです。

一枚の履歴書 - 7 -

父は無事横須賀砲術学校で戦車操縦士の免許を取得したのは間違いなさそうですが、その後、どこから出征したのかが解りません。しかし、陸戦隊に組み込まれていたのですから、多分、同じ横須賀から出発したのではないかと思われれます。そういうことを、今でも調べようと思えば調べられるようです。係役所は、厚生省です。確か、陸軍は厚生省で、海軍は自治省だったかもしれません。戦後何年たつてると言うのでしょうか。まだ官庁は仲が悪いのです。それとも官僚の縄張り争いかもしれません。陸軍は軍歴と言います。海軍は履歴とって、ここでも名称が違います。そして、父の履歴書にも、ここからの事は書かれておりません。昭和二十一年十二月五日復員、最終階級、二等兵曹と、戦争の終わった後の事について書かれているだけです。この間の事はどうだったんでしょう。飢えたこと、捕虜となって戦犯の調べがあり、現地の人がこの人は助けてくれたと証言してくれて助かった、と言ったこと、そのぐらいの事しか聞いておらず、むしろ何も聞いていないのと同じです。口にもできない話だったのかもしれませんが。足元に這ってきた蛇が御馳走に見える、蝙蝠を焼いて食べるといったことで飢えをしのぎ、生き延びたことは想像がつきます。一切のものを現地調達せよという命令のまま彷徨うことしかなかった現実を生んでおりました。父の語らなかつた現実を、残された体験談から知ることがもできます。しかし、大岡昇平を認めたくはありません。野火はなかつたことまで自虐的に描いたものとのみ、納得しています。しかし、その現実を招いた人たちはどこにいたのでしょうか。彼らの正義はなんだったのか、それでもなお彼らは戦後を生き延びたとは！。A級戦犯は正義の戦いをしていたと言い続ける人に、なお訊いてみたい。あなたの正義はなんですか。兵を二百数十万人殺し、なお日本を守るとは何ですか。

わたしはいま父の逝ってしまった年になっています。私は父の後を継いだものとして、父がどう生きたのか、何に巡り合つて、何をして、何を考えて生きたのかを知りたいと思いました。誰に知られることもなく、振り返られることもなく、私一人を残すだけで終わった一生でしたから、それは継いだものの責務と思っています。ほんの十数行の記述の履歴書で書き終えてしまえる一生を解って覚えておくことが、残されたもの、継いだものの務めと思っています。

しかし、これを私の子供に語り継ぐべきでしょうか。